



宗教の政治化か政治の宗教化か? 現代中東の宗派对立を社会的要因と国際政治の影響から読み解く



研究者所属・職名:
グローバル関係融合研究センター・センター長/教授

ふりがな さかい けいこ

氏名: 酒井 啓子

主な採択課題:

- [新学術領域研究\(研究領域提案型\) 「グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて: 関係性中心の融合型人文社会科学の確立」\(2016-2020\)](#)
- [基盤研究\(A\) 「現代中東・アジア地域における紛争・国家破綻と社会運動」\(2009-2011\)](#)

分野: 地域研究、国際関係論

キーワード: 宗派、イスラーム、国際政治、中東

課題

- なぜこの研究をおこなったのか? (研究の背景・目的)

2014年、「イスラーム国」(IS)がシリア、イラクで猛威を奮い、それを巡り中東でシーア派対スンナ派の宗派对立が暴力的な形で噴出しました。本研究は、その原因と展開過程を総合的に解明するために企画されました。特にイラク戦争以降イラク国内での宗派を巡る内戦が激化した事例(国内レベル)、シリア内戦やイエメン内戦では周辺国が介入して代理戦争化した事例(域内レベル)、その対立が顕在化してイランとサウディアラビアを軸とした覇権対立や米国を巻き込んだ国際紛争(国際レベル)へと発展した事例に光を当てました。

- 研究するにあたっての苦労や工夫 (研究の手法)

宗派研究は、ISやイラクでの内戦の発生を契機に、欧米諸国で多数着手されました。これらの同時進行する国際的な研究プロジェクトに対抗し独自性を打ち出すため、日本の地域研究の持つ、現地社会に対する歴史からの理解、地域密着型の調査の手法を活かし、宗派对立の単純化、本質主義視を排除し、欧米の宗派に対する固定化された視座に対するオルタナティブを提示するよう工夫しました。一方で紛争の頻発する現地社会に直接フィールド調査を実行する上での困難は、否定できません。



図1イラクで宗教指導者インタビュー(2017年)



宗教の政治化か政治の宗教化か? :

現代中東の宗派对立を社会的要因と国際政治の影響から読み解く

研究成果

●どんな成果がでたか?どんな発見があったか?

中東のイラク、シリア・レバノン、イラン、湾岸諸国、イエメン、トルコの事例を取り上げてそれぞれ宗派对立の事例を実証分析し、最終成果を「中東の宗派問題」として晃洋書房から出版しました。そこでは近年の宗派对立がイスラームという宗教の本質的要因からではなく、対立の内因性と外因性に着目する必要があることが示されました。特に宗派間関係を規定する内的要因としての差別や排除など社会経済的、歴史的背景に加え、外的要因である国際政治上の安全保障政策の矛盾や問題点の蓄積によって生じたという点が、特にイラク、レバノン、イエメン、湾岸諸国の事例に顕著にみられました。また、従来の宗派関係に関する本質主義的論争を超えた新たな紛争解決の糸口を提示するために、宗派的言説が過剰な暴力を伴う政治対立、衝突のなかに根を下ろす際の、宗派ネットワーク上に増幅してトランスナショナルに伝播するメディア(特にSNSや衛星放送など)の役割が明らかにされました。加えて、現在の中東の対立状況を説明する上で「宗派主義」という用語を使用することは逆に対立の本質を覆い隠すものとなり、むしろ「宗派主義」に代わる新たな分析概念を模索することが望ましい、という視点が提示されました。

事実、本研究期間が終了した2019年には、イラク、レバノンで宗派の差異を超えた広範な市民抵抗運動の広がりが目撃されています。「宗派」を自明のものとしてせず、さまざまな内的、外的要因や歴史的背景から読み解く本研究の結論が、現実に今、立ち現れているといえます。



図2 成果報告書の出版 (2019年)

今後の展望

●今後の展望・期待される効果

上述の成果報告書には、科研分担者だけではなく2016年に実施した国際ワークショップに招聘したハッタード(シンガポール大)、ヴァルビヨン(アーフス大)、ジョーンズ(ハリーファ大)に寄稿いただきました。彼らの議論は今、欧米での第一線の宗派研究を牽引しており、本科研の成果が発揮されています。また、代表者の酒井と末近が共著で執筆したSectarian fault lines in the Middle EastはRoutledge社のHandbook of Middle East Politicsに所収されて2020年4月に、また酒井編のIraq Since Invasionが同じくRoutledgeから2020年中に出版され、国際レベルでの議論に貢献します。

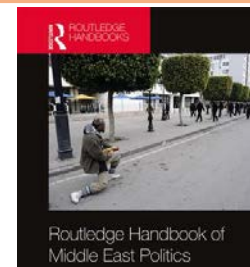


図3 英文出版物表紙